

21-3 ウエペケレ「アサハ セタネ イカラ」質問と解説

語り手：木村きみ
聞き手・解説：萱野茂

萱野：あー非常にいいね。

(笑い声)

萱野：これは a=saha seta ne i=kar [姉が私を犬にした] という、そしていま
の中でね、tu su ak ikot... うーん ikotuypa re su ak ikotuypa ちゅう。

木村：あの一、喧嘩すること。

萱野：うん、喧嘩するから。

木村：うん、そうだ。鍋煮たるみたいに、一回煮立った鍋と二回煮立った鍋の
煮たる間の喧嘩 (笑)

萱野：あーそういうことを、こうゆうふうに言う。

木村：tu su... tu su at ikotuyere... ukotuypare したとかって。

萱野：あーはーあーそうか、鍋一回煮たる間

木村：喧嘩する、二回も三回もする間に、そのくらいの間喧嘩ばかりしてた。

萱野：あーなるほどなるほど。

木村：うん、昔の鍋は大きいから、その鍋、二回三回大きな鍋煮たる間の喧嘩
(笑い声)

萱野：そうすると、その喧嘩するのが非常に間近いということ。

木村：うんうんうん

萱野：tu su tu su... tu su ap ですか？ tu suwat？

木村：tu su at

萱野：あつ、tu su at

木村：suwo... suw、atuhu、atuhu、tu su at re su at...

萱野：tu su ak ikotuy... ikotuypare

木村：tu su at re su at iko... ukotuypa

萱野：ukotuypa、u... uだ、なるほどね。tu su at うん、tu su ak ukotuypa re su ak ukotuypa ukoyki patek oka yak a=ye と、こういう調子だな？

木村：うんうん、そうそうそう（笑い声）

萱野：あーそうかそうか、なるほどなるほど。この一、こういうの録音しててね、聞いたことない言葉だけをメモして待ってるの。そしてこうゆうふう聞く。そうするとそれによって、次々にアイヌ語わかるわけだな。それからなんたっけ？ もうひとつ。

木村：niatus〔水桶〕

萱野：niatusはわかったんだ。そーかい。今のは、えーわたくしは姉と二人で何不自由なく生活……ね、普段、あまり不自由くないな。少しは、まー不自由はしたんだけど、まー兄が……あつ兄でない。姉が大切に私を育ててくれておった。それは子供のころは非常に仲良くしておったんだけど、やや一人前になったら姉はどこかへ出かけて行っては、一日いない二日いない。そして toytoy us se... toytoy us cep toytoy us kam〔土がついた魚、土がついた肉〕ちったか？

木村：うん、そう。

萱野：うん、そう、その土のついた肉、土のついた魚を持ってきてはそれを私に食べさせながら生活をしておった。でだんだん自分も一人前近く物心ついた以上に一人前の娘ぐらいになったら、姉はどっかに行っては一週間いない、そのうち十日いない。その月……その次には一か月いないというふうに、そしてはよく乾いたいい魚をひと山背負ってきて、そして私に食べさせ食べさせ生活をしておった。

そしたらある日の事、姉の言うのには、「わたくしは隣村へお嫁に行くからお前は一人でいなさい。一人でおっても女というものは、一人前になればお嫁に行けるものだから、私はお嫁に行くからあんたは一人でいなさいよ。」と言って、私をおいて自分の物を大きな toma〔ござ〕に包んで、背負って出かけて行った。

それを見た私は本当に悲しくなって、なんとか姉と一緒に出かけ、ついて一緒に行きたいと、姉が行ってしまったらあと父がおるわけでないし母がおるわけでないし、誰も近所に人もおらないもう本当に寂しいので、なんとか一緒についてってと泣きながらあとを追いかけると、戻ってきて私をめちゃくちゃぶん殴りつけてぶっ飛ばして、さっさと歩き始める。まだあとを追いかけていく。何回か繰り返すうちに姉は私を押さえつけて、ぎゅぎゅっと。こーあの *nuyanuya* とアイヌの言い方でしたんですけど、何か髪でもその手の中でぐるぐるっと、ま、あのがちやがちやとするような表現なんですけれども、私を押さえ、がしやがしやとやったと思ったら自分は一匹の犬になってしまったと。

それで姉はさっさと行く。あとへ追いかけて行こうとして、声を出せばワンワンという犬の吠え声しか出る。私は本当に悲しくなってしまうて、姉の行ったあとへ一緒に行こうとしてもそれもできないし、戻って自分たちの住んでいた家へきた。いままでは煮た物ばかり食べて生活しておったのに、急にそれが生ものを食べるということもできないし、腹すきまぎれに食べても、それも思うようにいかない。

それが何日か何か月か続いて、もういまはこのままだら死ぬんじゃないかとそんなふうに思われるぐらいに私も痩せ衰えて弱った犬になってしまった。それで姉が川を上ってずっと上の方へ行ったので、姉のどこに行きたいなとそんなふうに考えたものだから、だいぶ川を上の方へ上って。 *pet turasi* だな。

木村：そうだ

萱野：川を上って行くと、そしたら姉が兄（＝夫）と一緒に魚捕りをしていた。それは秋味、サケ、シャケですけれども、それを捕っておった。でもどっさり魚を捕っておるそのそばに行ったら、姉は「どっから来たこの瘦せ犬め」と言いながらも自分を見たふりもしない。そうすると一緒におった大きな大犬が自分に襲いかかってきて、もううんと虐められて本当に殺されるかと思いつつも、ようやく死にもしないでおった。

姉達は魚をいっぱい「トゥリ」(turi) といって、このウエペケレ〔散文説話〕、非常に情景描写が細かくできておるんですけども、魚を捕った魚を「トゥリ」(turi) という舟を漕ぐ竿にいっぱい通して、その竿がたわわにしるぐらいに魚を家の中に持って入るなんて、そうゆう細かい描写してありますが、いっぱい魚を持って家の中に入ろうとした。私も一緒に入ろうとしてもさっぱりよくもしてくれないし、行ってよくよくこう……まあ、昔人間であったがゆえに人間の生活がよくわかるので、こうよくよく見ると何かそのお祝い事か何かあるらしく女の人達も大勢出たり入ったりしておると。家の外では iuta といっているいろいろ搦き物したり、餅をついたり、団子ついたりしておる。

そうすると女の人達おる人の半分は「何だ汚い犬だ」と言い、おる人の半分は「どっから来た犬だろ？ かわいそうにこんなに痩せて」と言いながら、餅をくれたりするんで、そこで晩までおった。

そして、家の中で酒盛りか何か始まって大勢の人達が出たり入ったりする時に、一人の男の人が ih_okus'amip... amip といって着物を裏返しに着た。これは、妻を亡くしたり、夫を亡くしたりすると、アイヌはそうゆう風習あるんですが、多分、最近妻を亡くしたらしき男の人が入りながら私の頭をなでながら入ってきた。

そして、酒盛りが終わって出る時も私の頭をなでながら、「これは、もらった肉だけどあなたにあげるよ」と言いながら肉をくれて、外へ出てったけれども、非常に好感の持てるひとなので、この人のあとになって私生きる道はないんじゃないかとそんなふうに考えたので、大急ぎでその男の人のあとを追いかけて行った。

そうすると村外れに一軒の家があって、そこへ入って行ったので一緒に入っていったら、「いやいや、つい最近自分の家内が死んでしまつて、自分ひとり住まいなのに犬ではあってもあなたが来ても食べさすものもないな」と言いながら何かかにか食べさしてくれた。そして、そこで他に誰も他に人間もおらないもんだから、その男の人が一緒におって何か炊いては食べさしてくれるものだから、何日か何か月か日が過ぎていった。

でも、昔は人間であったし、いまは犬ではあるけれども考え方は一人前の人間なので、何とかせめて猟に行き帰ってくるその男の帰ってくるまでに火の一つも焚きたいな。あるいは水の一杯も汲みたいなとそんなふうに考えて。

ある日の事、niatus といって木の皮で作ったバケツをくわえて川へ下りて行った。水.....せめて水をくわえて、バケツをくわえて水を汲んできたなと、そんなふうに考えて川へ下りて行ったと。そして、バケツを川へ入れてボンと水を汲もうとした途端に、空の時は良かったんだけど水がいっぱいに入ると、ググッと流されて川へそのままその自分もその犬も一緒にもう自分も川中へそのバケツに引きずられて落ちちゃった。なんとかこのまま流れちゃ死んじゃう。立とう立とうとしてバチバチとやって立ったらそれが人間になって、わたくしは立った。

いや一本当に嬉しくて嬉しくて、犬であったものが元の人間に返ったものだから、それは本当に嬉しくなってしまうと、喜んで家の中へ入って行って、そして、その男の帰ってくる前に準備をした。いろいろ火を焚いたり、今度は犬でないものだからちゃんと準備をして待っておいたら、準備というのは山から帰ってくる前に火を焚いたり、掃除をしたり、水を汲んだり、ご飯を炊いたり準備でしょう。

そうやっておるところへ帰ってきて黙ってその男が入ってきたら、いつもの犬がいないで、本当に綺麗な綺麗な女の人が、しかもさっそくお嫁にできるような女がおるもんだからその男は嬉しいのか困ったのか、目のやり場もないというような風情でおったんだけど、黙って座って考えてから自分のうしろの方に手をやってというのは、その自分というのはその男なんです、男がそこへ手を伸ばして、一つの seppa [刀のつば] を取って、seppa だな。

木村：そう。

萱野：seppa というのは刀の鏝ですけれども、それを取ってお膳に乗せて私の前へよこしながら、アイヌの風習そうゆうことあるんですけれども、何かものを尋ねるとかそうゆ時に itak'ipe とか言うんだったな。

木村：うん、それそう

萱野：その「ものを喋るその代償をだしますから、喋ってください」と言ってその seppa [刀のつば] を自分のとこへよこして言うのには、「どうし

てあなたが来たか知らないが、あなたの来た.....あなたが犬であり、それが今人間になったのかもしれないけれども、それをひと通り話をしてはくれませんか」と言ってよこしたので、わたくしはもう嬉しさと悲しさと入り混じった気持ちを喋って言うのに、喋って、いままでの姉と生活をし、姉は私を置いて出てきた、そうゆうことを言ったら、「いやいやそれはそれは本当に大変でしたと。それではどうぞ私も独り者ですから、家におって火を焚いたり薪を.....薪の準備したりしてください」とそうゆうふうにして何か月か過ぎた。

そしたら男の言うのには「私も独り者だから、私のお嫁になってくださいませんか」と言うので、お嫁になることに決めて、そして、お嫁になった。そのうちに姉達は、私がこうゆうところへ来てお嫁になったのを聞いたからか、どうしてか知らないけれども、夫婦喧嘩ばかりをしてさっぱりいい生活もせずにおった。

私を犬にした理由は、姉はあまり器量がよくなくて、私自身が非常にいい器量であったので、それを妬んで私を犬にしたんであったと。いまの場合は非常に幸せに暮らしておるけれども、こうゆうことで精神のよくない姉に犬にされたこともあった私ですけれども、いまは子供もたくさんおって孫もたくさんおって、何不自由なく暮らしておると一人の男が語りました。

この中でさっきあのテープにも入っておりますが、**tu su ak ikotuypa re su ak ikotuypa** というふうに、喧嘩を夫婦喧嘩の始終するという表現にその鍋をかけて鍋を煮立つ間にでも二回も三回も喧嘩するぐらいにその喧嘩をするということなんか、新しい言葉としてでておって非常にいい **uepeker** [散文説話] だったと思います。

どうもありがとうございました。

これは録音はペナコリの木村きみさんにやっております。和訳はわたくし萱野茂です。